

日時：2023年9月4日（月）10：00～11：40

場所：H211 教室

担当：三浦、柴田

参加者：26名

太田、吉岡、石野、上野、喜多、柴田、百海、三浦、水上、村上、森田、山田、米川
（非常勤）奥村、小西、坂井、竹田、田中、小川、表、川岸、川邊、黒崎、米谷、大久保、源代

テーマ：各授業科目における到達目標の達成状況に対して成績評価が適正であるか。GPAの分布や授業アンケート結果から学習成果の達成状況を評価し査定（アセスメント）する
～前期の授業を振り返り、多様な学生指導（退学者防止）と授業運営について考える～

太田学科長からの挨拶、教務部からの幼児教育学科3ポリシー改定およびそれに伴う学習評価項目の改定についての説明がされた後、三浦先生から「基礎学力テストと追再試験」に関する話題提供、そしてテーマに関連したグループ討議へと進行した。グループ討議の後は米川先生から幼児教育学科新特化構想についての説明、最後に吉岡副学長から金城子育て支援センター1周年記念講演会お知らせを含めた挨拶があった。

（1）「基礎学力テストと追再試験」

幼児教育学科では学生の入学前に基礎学力テスト（高校2年生対象）を実施している。2022年度と2023年度を比較すると、全国平均点が若干上昇していることとは対照的に、本学科入学生平均点は若干減少している。学生の基礎学力が低下傾向にあると考えられる。基礎学力の低下と退学者との関係は明確には出ていないが、再試対象者となる割合は基礎学力テストの低さと関係している。特に基礎学力テストの低い学生は、1年前期試験において再試となる学生が多いため、その後の学校適応への困難を予測する一つの要因と考えられるだろう。学生フォローとも関連づけて考えていくことが必要。

（2）グループ討議（4～5名の6グループ）

各グループにおいて、学業不振や対人関係への不安、動機づけの乏しさなどを示す学生が多いことについて、学生側の要因や学生以外の要因（学校や家庭など）を検討した。そして学生を支援するための具体的な目標についてもグループごとに検討し、その後全体で共有した。



グループ討議結果の一部を以下に示す。

- ・持って生まれた「生きづらさ」を抱える学生が多い。一般的なマナーや種々の問題への解決スキルも不足している。

→目標：教員が気付いた時に教える姿勢を持つ。学生同士で教え合う機会や風土を作る。

- ・習得していた当たり前と思われる割り算すらできない学生もいる。学びの積み重ねがこれまでできてこなかった、指導や評価もされてこなかったのだろう。学生には大人に「守ってもらえる」という安心感が足りていないのかもしれない。短大で教えるにしても、個別指導に実際のところ限界もある

→目標：学生一人ひとりに関わっている意識を教員ももつ。名前をしっかりと呼ぶ。具体的に褒める。

- ・身体的にも対人的にも不器用な学生が多い。基礎学力が不足していることも実感する。教える側としても、合格の最低レベルを目指すことが増えてきているところに葛藤を覚える。

→目標：成績評価の基準を明確に守るためにも、単位不認定とした後のシステム作りが急務。

- ・保育で行うようなあそびについて、学生自身の体験が不足している。これは学生だけの問題ではなく、現代の園における課題でもある。短大の授業の中でも、なるべくその体験不足を補うことができるとうい。

→目標：あそびでもコミュニケーションでも「正解はない」と体感できるよう、学生の表出する言葉や意見を教員がしっかりと受容することが大切であり、そのような場を作る。一方で、ダメなものはダメというような毅然とした対応も必要である。

- ・学生の一般的な常識やマナーが低下していることを感じており、社会経験の不足と関係しているものと思われる。幅広く多様な学生に対して、学校だけでなく家庭もフォローしきれていない現実がある。

- ・あいさつができない学生が多い。授業では意欲が乏しく、聞いていないように見える学生が多い。しかし一方で、レポート課題となるとそつなく書くことのできることに気付くことがある。ヤングケアラー等家庭の事情を抱えている学生が多く、全般的に疲れているところはある。

→目標：あいさつについては、まず教員からわかりやすく学生に示す。そこから伝えることや関わることを始める。